巻頭言

『阿弥陀経』所説「経行」の解釈をめぐって坐禅中に考えたこと

仏教文化研究所兼任研究員
河智義邦

かつて筆者は、『本願寺新報』（本願寺出版社）において、二年間にわたって『阿弥陀経』の解説と法味・随想を連載したことがありました。最近になって、その内容についてアップデートすべきことがあったことを思い出しました。きっかけは四年ぶりに一泊二日で実施したゼミ旅行でした。二日目の最後に京都・天龍寺を訪ね、学生とともに坐禅体験をしたときに「経行（キョウギョウ）」の二文字がふと浮かんだのです。禅仏教では「キンヒン」と読み、坐禅に伴う足の痺れや眠気を取り除き、心身を整えるために一定の場所を歩くことを言います。

羅什訳・『阿弥陀経』では極楽浄土の荘厳の特色が四種にまとめて説かれていますが、その第三に天楽・金地・妙華の荘厳について次のように説かれています。

又舎利弗。彼仏国土。常作天楽。黄金為地。昼夜六時。而雨曼陀羅華。其国衆生。常以清旦。各以衣裓。盛衆妙華。供養他方。十万億仏。即以食時。還到本国。飯食経行。舎利弗。極楽国土。成就如是。功徳荘厳。（傍線筆者挿入）

浄土にはすぐれた音楽が響き渡り、大地は黄金で麗しく、昼夜六時に妙華が降り、菩薩たちは花器に曼陀羅華を盛り諸仏を供養します。そして食事の時までには帰ってきて飯食（法の真理を頂いて）し、食事の後に散歩して一定の道を往復し身心の疲れを整えます。一般的にはこのように解説されています。

食後の散歩（一定の道を歩行）が「経行」の意味にあてられています。この「経行」について畝部俊英氏[1]は梵本〈阿弥陀経〉では当該箇所は「divāvihāraya」となっていて、「昼の休息」「昼住」と訳すのが慣例であって、樹の下に坐って瞑想をすることが原意であると指摘されています。「歩行」を意味する経行の原語は「梵語caṅkramaṇa.巴語caṅkamana.」で、「キンヒン」と同意です。つまり『阿弥陀経』の原意では、菩薩は食事の後に坐って休息（瞑想）したということになります。畝部氏は両原語の訳語を吟味しつつ、『中阿含経』に「divāvihāraya」を「昼経行」「昼行」と訳す例も見られるので、羅什は食後に行う「坐る経行」の意味で「飯食経行」と訳したのであって、やがて日本では「飯食」と「経行」が切り離され、「経行」が一人歩きしてcaṅkramaṇa.の「歩く経行」といった意味に解釈されるようになったと述べています。これをうけて、浄土の衆生（菩薩）が坐って瞑想をすることは特段珍しいことではないと思うので、今後『阿弥陀経』の解説本がそのようにアップデートされても問題は無いように思います。

さて、「現代人（日本）が仏教に何を求めているか」を関連著書の売り上げランキングから分析した結果[2]によると、瞑想、修行、仏教思想の日常生活への応用といった、体を使った行動や、そしてこれらに裏付けられた内容に興味が持たれる傾向があり、仏教の公益性、死生観、信仰、仏事、儀式に対する関心は高くないとされています。また、浄土真宗の米国開教の現場（各地の仏教会・寺院）では、過去に「そちらの寺院では瞑想（meditation）ができるか」という問い合わせに、浄土真宗

では行っていないと回答すると、即座に電話を切られ、ご縁が失われてしまうというお話を伺うことがありました。ゼミ旅行に参加した学生にとって、にわか坐禅体験ではありましたが、禅師の熱心な指導にもふれ感銘を受けたようでした。私自身も気分転換に日常的に行っています。

近年、若い世代（団塊の世代も含めます）では、寺院（特に筆者が所属する真宗寺院）への関わりは希薄になり、法要の参拝者も減少の一途をたどっています。若い世代を呼び込むためにコンサートや漫才などのイベントを開催するなど様々な試みがなされていますが、継続性に疑問が残ります。せっかく同じ仏教の枠内に瞑想という社会的ニーズが高いプラクティスがあるので、これを取り入れないのはもったいない気がしています。浄土真宗的には雑念とのお叱りを受けるかも知れません。

『仏教文化研究所紀要』第二十三号をお届けいたします。ご執筆賜りました諸先生方にお礼申し上げますとともに、法義相続の念をもってご高覧賜りますようお願い申し上げます。

令和五年（二〇二三年）三月三十日

---

① 畝部俊英「『阿弥陀経』における「経行」について」（『真宗研究』第四十七輯　平成十五年）

② 多田修「現代人は仏教に何を求めているか ―アマゾンランキングを通しての考察―」（『浄土真宗総合研究』十一号　二〇一七年）